



[果樹部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

8. 「オーロラブラック」の小房栽培における花穂整形方法

[要約]

「オーロラブラック」の小房栽培で、300g程度の果房重を得るには、1穂軸の40mm以上離れた2支梗を残して整形し、それぞれの支梗長を15～20mmに調整する。これによって必要な粒数が確保でき、小房同士の密着による商品性の低下がない2つの小房を生産できる。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 果樹研究室

[連絡先] 電話 086-955-0276

[分類] 技術

[背景・ねらい]

個人消費のニーズに応じて、県産ブドウの新たな消費需要を喚起し、需要拡大を図ることを目的として、高品質な小房ブドウの生産技術を確立するため、小房ブドウ栽培に適した「オーロラブラック」において、果物専門店への出荷に適した250～350g程度の小房を1穂軸に2つ同時に安定的に生産できる花穂整形法を開発する。

[成果の内容・特徴]

1. 花穂整形として、満開6～7日前に1穂軸の40mm以上離れた、支梗長15～20mm程度の2支梗を残す(図1)。花穂整形時の支梗間距離が40～50mmでは、収穫時に小房同士が密着して、房形が乱れたり、果粒が潰れて商品性が低下する小房が10%程度混在するものの、ほとんどの場合、商品性の大きな低下はみられない(図2)
2. 着生位置が上の支梗の二次支梗を穂軸に近い側から切除して支梗長を調整する(図1)。支梗長(2016年は二次支梗切除による調整後)と粒数との関係は、いずれの年も高い正の相関があり、年次変動は小さい(図3)。平均果粒重20gを目標とする場合は、果粒数を15粒程度必要なため、上の支梗は二次支梗を切除して15～20mm程度とし、下の支梗は15～20mm程度とする。

[成果の活用面・留意点]

1. 小房の花穂整形は、花穂上部の支梗を用いるため、慣行の花穂整形に比べて、やや早めの時期から実施するのが望ましい。
2. 花振るいを防ぐため、開花期の摘心を徹底するとともに、無核肥大処理を適期に行う。
3. 無核肥大処理は、満開期にフルメット10ppm加用ジベレリン25ppmを処理する。
4. 結実後の摘粒は基本的に行わない。
5. 本果房管理方法は岡山県が特許を取得しており、現地での栽培に際しては岡山県の許諾を必要とする。



[具体的データ]



図1 「オーロラブラック」小房の花穂整形

2つの支梗を残して他の支梗を切除し、更に着生位置が上の支梗の二次支梗を切除。図中の暗転部は切除部位を示す（左）

花穂整形後の様子（中） 収穫時の様子（右）

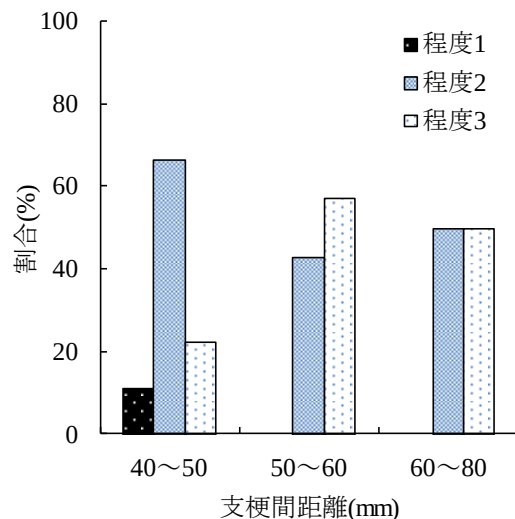


図2 「オーロラブラック」小房栽培における花穂整形時の支梗間距離と収穫時の離れ程度^Zの割合との関係（2015年）

^Z程度1：小房同士が密着し、房形が乱れたり、果粒が潰れて、商品性が低下する
程度2：小房同士が接触しているが、商品性の大きな低下はない
程度3：小房同士が離れており、商品性に影響がない

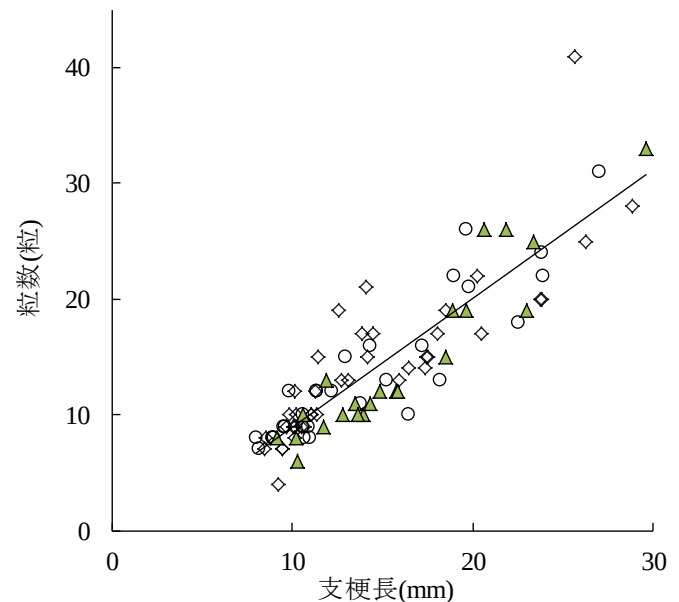


図3 「オーロラブラック」における花穂整形時^Zの支梗長^Yと収穫時の粒数との関係(2014~2016年)

^Z花穂整形はいずれの年も満開6~7日前に行った

^Y2014年は1穂軸に3支梗、2015年は1穂軸に2支梗、2016年は1穂軸に2支梗残し二次支梗を切除した残りの長さ

[その他]

研究課題名：個人消費のスタイルに即したブドウ生産技術の開発

予算区分：県単

研究期間：2014~2016 年度

研究担当者：中島 譲、安井淑彦、平井一史

関連情報等：1）特許第 5751507 号「無核ブドウの房づくり方法、及びその方法によって生産される生食用ブドウ」

2）[平成 27 年度試験研究主要成果、57-58](#)